

# 都市の窓

朱雀・白檜集

水馬の追うて追はれて群のうち

森 有也

六月の光へ跳ねて鯉黒し

三森 梢

雪溪を登り詰めたる花浄土

川合 岳童

手術後の覚めてこの世の扇風機

高橋 亘

青桐集

鮎届く川の匂ひも漂はせ

宇津木 江

緑蔭に湯浴みのごとく坐り进行

大木 満里

色といふ色が売られて浮人形

本多 燐

飯食べてひとつ強むる扇風機

井手あやし

唐十郎逝去せりこの修司忌に

田中 聖羅

一斉にレースヨットの滑り出し

長谷川 積

牛拗ねて牛車牽かぬも賀茂祭

嶋田 正次

都市集

向日葵や素顔の吾はいくぢなし	外山 糖子
夏帽子直木 <small>すぐき</small> の森に身を伸ばし	永井 詩
割勘に勝ち負けありてピアホール	金 いがん
空港やコイン残りてレモン水	高橋 芳
亡き夫の時計止まらず合歓の花	角田 球
ティッシュ引くやうに解 <small>ほぐ</small> るる牡丹かな	平澤ひなこ
玉虫に心残してバスに乗る	下村あや香
手に残る父の微熱や五月闇	岩崎 曜
新樹光ゴール下なる水たまり	砂金 明
ビー玉のあぶくの光る薄暑かな	山路 泉 <small>せん</small>

# 都市の窓

朱雀・白樫集

朝寝して安房の明るさ楽しまむ  
親類が来たやう軒のつばくらめ  
若き駅に若き桜の並木かな  
山茱萸や頬にぴりりと朝の風

青桐集

金婚や汝なにたんぼぼの金メダル  
B 出口の空や都心の鳥の恋  
土手の花見えて郷里の駅間近  
出前機の花屑付けて並びをり  
春の雨作業服にて母の通夜  
マニラてふ食堂暗く鳥雲に  
飛花落花波の光に吞まれけり

桜木 七海

安藤 風林

岩原 真咲

星野 佐紀

秋澤 夏斗

吉良 唯

高橋 芳

小寺 檸檬

宇津木 江

井手あやし

嶋田 正次

大鶴のジャンプや花芽啄みぬ  
花冷や身体からだ中から声出す子  
事故処理の終はる街角燕来る  
都市集

鶯笛 買ふや私の囁りに  
山焼の余熱足裏に野を下る  
春よ春神々息を吹き遊び  
繰り返す遅延の知らせ花の駅  
春の陽や暗渠の顔を出すところ  
修司忌や同じ時代を経し友と  
花楓鳴き真似うまき飼育員  
老鶯の何故か外るる末の音  
摺り足の能体験や麗けし  
隴夜の亡妻まと子供の話など

平澤ひなこ  
島田 遊妹  
樋口 冬青

大矢知順子  
中島 晴生  
永井 詩  
鈴木ちひろ  
打木 歩人  
角田 球  
山中あるく  
菅野 れい  
横山 千砂  
嶋田 正次

# 都市の窓

朱雀・白樫集

寒の水女杜氏は紅ささず

森 有也

寒鴉路上の歌手に寄りて鳴く

安藤 風林

鉄瓶の湯気に影ある寒さかな

中島 晴生

青桐集

初夢に笑みをこぼしてゐたやうな

大木 満里

五感より第六感や亀の鳴く

砂金 明

月影の崩れて鴨の一羽二羽

秋澤 夏斗

卒業す林野育む者として

上原 いと

病みついて髪の毛の匂ひや久女の忌

外山 糖子

ほめらるる夢から覚めて春の昼

三遊亭らん丈

旅信書く幸せと書く花の宿

竹生田 棗

都市集

孟浩然また唱へては朝寝かな

金 いがん

富士壺は漁網の花や春の波

盛田 恵未

抱きし児の頬の産毛よ風光る

宇津木 江

バーの扉を開きてバレンタインの夜

ゆたか 一空

角打やコート of 袖の触れあへる

岩原 真咲

湯気 上ぐる 裸男や春祭

土屋 良夫

十二月電飾映し都バス過ぐ

長谷川 積

風吹くな白き辛夷の傷つくな

丸山 桃

春の鶉かしぎし樋に水浴びて

山中あるく

# 都市の窓

朱雀・白樫より

銀杏落葉うつむく頬を明るうす  
温突オンドルのことしみじみと老いし夫  
一茶忌の白皚皚と北信濃

青桐集より

電工の冬青空を職場とし  
落葉よ落葉何故急ぐ母の逝く  
駅前駅前に楽器集まるクリスマス  
ベンチとは冬暖き響きかな  
マネキンの眠らぬ店や夜半の冬  
白鳥の飛翔の腹に朝日かな

森 有也

岩原 真咲

川合 岳童

砂金 明

横山 千砂

吉良 唯

本多 燐

臼井 走

平澤ひなこ

都市集より

音は海へとニューイヤークンサート	小寺 檸檬
冬晴の空に麒麟の咀嚼かな	小林たまご
冬の夜や辿り読みする子の眉根	下村あや香
枯野ゆく川の蛇行や遠筑波	打木 歩人
寒月や父からはずす細き命 <small>めい</small>	土屋 良夫
百歳 <small>ももとせ</small> の冬木の中を息深く	角田 球
息白し出陣のごと闇に出づ	金 いがん
初明り夜勤は無事と娘より	外山 糖子
枯芒旅に過ごせる日々も老ゆ	落合 秀岳
毛糸帽かぶり厨の修行僧	小林 由寿



# 都市の窓

白樫集・青桐集

星飛ぶや文字なき民の恋の歌  
 競ふこと忘れて久し種牡馬肥ゆ  
 栗茸を詰めて袋の曇りをり  
 秋風や燦燦と過ぐ五十代  
 結局は同じセーター選ぶ父  
 中秋無月地は一面の街灯り  
 訪ふ人のなき昼下がりに小鳥来る  
 ふつと母生を手放し星月夜  
 秋うらら車掌の英語なめらかに  
 実物は小さき仏文化の日

都市集

稲刈に加はらぬ子の捕虫網  
 地下街にも路地裏があり新酒汲む  
 鈴虫と同じもの食ひ早寝せり  
 乗り過ごし歩いて帰る柿日和  
 吾が拠点作るがごとく炬燵置く  
 コンビニの袋を下げて良夜かな  
 蟪蛄の風になるまで吹かれをり  
 吾亦紅一輪差して野をここに  
 月天心姉の手そつと握りけり  
 新米の湯気も光るや玉子焼

三森 梢  
 中島 晴生  
 北杜 青  
 加瀬みづき  
 三遊亭らん丈  
 高橋 亘  
 田中 聖羅  
 永井 詩  
 大木 満里  
 小寺 檸檬  
 井手あやし  
 本多 燐  
 小林たまご  
 嶋田 正次  
 土屋 良夫  
 小林 由寿  
 上原 いと  
 宇津木 江  
 外山 糖子  
 高橋すみれ